

本特集テーマの由来はのちほど述べるとして、掲げたテーマ文言の核心は「浸潤」である。接触や衝突についてはこれまでも再々議論が重ねられてきたが、異文化の浸潤が問題とされることは多くない。そして、異文化が相互に浸潤することで元々の姿を保っているかもしれないが内実としては化学変化を起こしてしまっていること、その後、何らかの外的条件によって相互に浸潤して「ひとつ」となったものが、それぞれ元の位置に復帰せざるを得なくなったときに、物理的に引き裂かれてふたつの別の場所へ回帰しようと試みる。そうした歴史的現実のあることは、われわれの身の回りに思いつくところがあるに違いない。

しかし、それはどだい無理な話である。そうした無理を押し通そうとするとところに摩擦や軋轢が生じることになる。融合したものは不純だと見なし、混じりけのない純粋なものに高い価値を見出そうとする動きのなかでは、主導権を握ろうとする者たちのあいだに隠べいや虚言や伝説が紡ぎだされることとなる。そうした歴史過程に着目しながら、異文化の接触と衝突を見直したいと考えた。

さて、「国境未満の異文化接触／衝突／浸潤」は、筆者を研究代表者とする科研費（挑戦的萌芽）グループ（計9名）の研究課題（課題番号26580125）である。研究代表者以外のメンバーは以下の通りである。真栄平房昭、渡辺美季、河西秀哉、坪井秀人、日比嘉高、福原裕二、木部和昭、高江洲昌哉（科研申請書類の記載順）。

さて、本科研は、グループ科研にしては拘束の緩やかな活動を行ってきた。研究課題に即して各メンバーに課題を割り振ったり、作業の分担をしたりというよりは、メンバーそれぞれが個々に進めているテーマを科研テーマに即して読み込むとどうなるか、そしてそれらを持ち寄ってみると何が見えてくるか、という進め方で今日までやってきた。そして、フルメンバーではないが都合のつく限り最大多数が集まった現地調査が二回ある。



最初は2015年9月19日～22日、鹿児島県と沖縄県の近接する沖永良部島で現地調査を行った。小さな島は西郷隆盛の流刑地としても知られ、また島内各地に散在する中世に遡る墓跡は琉球王国の影響が濃厚である。地元・沖永良部島知名町中央公民館の前利潔さんのご尽力で、公開研究会\* (9月20日午前)と公開シンポジウム\*\*(同日午後)、地元の方たちとの交流会(同日夜)、沖永良部島の全島踏査(21日)など、充実した数日を過ごした。なお、20日の公開研究会・シンポジウムの様子は、地元の南海日日新聞(9月22日付)でも、「島民約50人が来場し、熱心に耳を傾けた」と写真入りで紹介された。

\*公開研究会での発表者・発表題

真栄平房昭 「境界を越えて移動する人・モノ」

河西秀哉 「敗戦後の昭和天皇と「日本」意識」

福原裕二 「鬱陵島に渡った日本人」

坪井秀人 「『あいぬ物語』と『アイヌ神謡集』における〈国境〉」

木部和昭 「明治前期韓海出漁をめぐる日朝国境海域の動向」

なお、前利潔さんも口頭発表を行った。

\*\*公開シンポジウムでの発表者・発表題

池内敏 「近世日朝間の漂流事件と漂流日記」

高江洲昌哉 「鶏飯をめぐる政治文化史—郷土・伝統・我々を再考するために」

渡辺美季 「ある島役人の『東アジア』—『渡琉日記』を題材に—」

なお、前利潔さん、宮城幸也さん(知名町生涯教育課)も口頭発表を行った。

二回目の調査は、2016年2月5日～8日に北海道北端に近い利尻島で行った。ここは、江戸時代はじめには幕府の支配が及ばないアイヌの生活圏であった。17世紀末、利尻島に漂着した朝鮮王朝の末端官僚は漂流記を残したが、アイヌの発したことばをハングル表記で採録していて興味深い歴史資料となっている。地元の利尻博物館元学芸員の西谷榮治さんのご尽力で、戦前に利尻島から樺太へ渡り、戦後になって島に戻ってきた人たちの体験談を伺った。

2月7日(日)午前中は西谷榮治さんの案内で、雪深い利尻島内の史跡探査を行った。午後は利尻富士町交流促進施設りぶらで、樺太からの引揚経験者3人(76歳、80歳、81歳)からの聞き取り調査を行い、その後引き続き研究交流会\*を行った。

\*研究交流会での発表者・発表題

木部和昭 「『唐太話』——長州人の見た樺太・蝦夷地——」

福原裕二 「韓国・鬱陵島現地調査報告——「国境」との関わりで——」

河西秀哉 「象徴天皇と北海道北部」

池内 敏 「細井肇の和訳『海游録』」

坪井秀人 「北原白秋の樺太行」

日比嘉高 「樺太における日本人書店史ノート」

なお、西谷榮治さんも口頭発表を行った。

2月8日(月)は、午前10時ころから利尻町公民館で樺太出征経験者3人(87歳、89歳、90歳)からの聞き取り調査を行い、場所を移して昼食をとりながら午後1時半すぎまで懇談を続けた。

なお、7日と8日の二回の聞き取りは、前者が1945年時点で6歳～11歳、後者が同じく17歳～20歳であったという年齢差もあり樺太での体験・記憶に明確な差が感じられた。後者の場合には自らの立場と世間とのかかわりの自覚が鮮明なものとして示されたからである。一方、そうでありながらも、1945年8月15日を境にしてすべてが急変したわけでもなかった

ことが、樺太における学校教育の継続性やソ連軍との戦闘の連続などから語られた。それらは前後者共通の記憶として留められ、また日々の食をめぐる渴望の思いにも近似性が感じられた。

さて、本特集には科研メンバーのうち7名の論考を掲載させていただくこととなった。それぞれの関心に添うかたちでの作品である。ここに要約などはせずに、読者の方々にそれぞれをきちんと御味読いただければと思う。なお、科研メンバーのうち真栄平、渡辺のお二人からは御寄稿いただけなかったが、たまたまやむをえないご事情があったためである。

(文責・池内 敏)

